

姫路文学館
紀要

NO. 25

令和4年(2022)3月

史都姫路の魅力 司馬遼太郎と歴史家の眼

歴史学者 山内 昌之

一
ご紹介いただきました山内です。本日はよろしく願います。

司馬遼太郎さんのご夫人のみどりさんが、「司馬さん」とおっしゃっていたことに倣いまして、周辺の人間は「司馬先生」とあまり言わないで「司馬さん」と呼んでいます。私もそのように呼ばせていただいております。

ご案内のとおり、『播磨灘物語』など姫路に関わる小説を含めて、まず読者として司馬さんの文学に楽しんで参りました。

司馬さんご自身は、そのルーツがお祖父様の代まで播州の広村、今日の姫路市広畑区にあり、当地の広畑天満宮にはお祖父様とお父様が寄進した際に名を刻した玉垣があると聞いております。また脇坂家の城下町であった龍野には、有名な脇坂の二本道具の槍のさやに貂の皮を使ったという話があり、それを素材にした『貂の皮』という短編小説が書かれていて、私も好きな作品です。

歴史学者の私と小説家の司馬さんと一番近い場所でお付き合いさせていただいたのは、ヘウタリ対策のあり方に関する有識者懇談会でした。アイヌ文化振興法の議論と一緒にさせていただいたというのが、たいへん懐かしい思い出としてあります。この有識者懇談会は平成七年（一九九五）から八年（一九九六）にかけて行われ、

今日のようにアイヌ民族の先住民族認定という道に大きく舵をきるようになった、日本政府、あるいは日本国民にとって大事な法律と一緒に作るうとしました。しかし、その途中で司馬さんは平成八年二月に亡くなられるという、まことに残念な結果になりました。その上、縁がありまして、大変名誉なことに第五回司馬遼太郎賞を平成十四年（二〇〇二）に受賞いたしました。その後、上村さんのご紹介にもありましたように司馬遼太郎記念財団の評議員をしており、また一方で司馬さんの縁があった姫路で、姫路市が主催する和辻哲郎文化賞選考委員という仕事もさせていただいております。

先ほど上村さんが、私が格闘技好きだということをおっしゃいました。子供の頃にプロレス、相撲で育ちましたが、残念ながら職業的にプロレスとはかわりありません。相撲は、横綱審議委員をしております。司馬さんはなさらなかったと思いますが、これは小説家の方々もしばしばなさる仕事です。

私にとって姫路は、北の湖部屋を継承した元蔵雄の山響部屋などが育てている立派な力士たちが姫路出身だということを思い浮かべます。播磨灘、最近では三段目で活躍している家の島と家島の兄弟、それから龍野出身では、白旺灘、北播磨。BS・NHKを見ますと三段目あたりの相撲もやっていますので、ぜひ相撲に、家島兄弟などの健闘に関心をお持ちいただければと思います。

二

今日、私が一番目にお話したいのは、歴史学者として、イスラム世界や中東の専門家として、「姫路」と聞いた場合、日本人、あるいは日本の学者として、何が第一印象として感銘を受けるかといえます。それは名前の優美さ、地名の典雅さということにつきます。

これは世界史的に見て私の知る限り唯一の用法ですが、「江戸」という地名に「お」を付けて「お江戸」と呼

ぶ丁寧な言い方や、誇りに満ちた江戸っ子や東京人の言い方はあります。丁寧ですが「江戸」という名前そのものに、典雅さや奥ゆかしさが含まれているとは言いがたいです。

ところが「姫路」は、姫路城の位置する姫山の古名として『播磨国風土記』に「日女道丘^{ひめぢをか}」と出ており、この「姫路」という漢字、それから「ひめじ」という呼び方そのものが、漢字国民でもある私たちに或る種の奥ゆかしさと優雅さを感じさせます。私はこのような漢字で書かれた優美な地名は「姫路」が一番ではないかと思っています。

私は北海道の生まれです。札幌で生まれ、小樽で育ちました。小樽は、アイヌ語で「オタ・オル・ナイ」、これは「砂浜の中の川」という意味で、自分がアイヌ語に由来する名を持つ場所に縁があることを大事にしています。他方、「姫路」という名前は、日本語の核になる和語からきているたいへんすばらしい呼び名です。

こういうすばらしい地名というのは、それぞれの国にあります。私が専門にしているイスラム世界を例にとりますと、サウジアラビアの首都であるメッカは、普通は「ウンム・アル・クラ」、マッカ・アルムカッラマ」と呼びます。「マッカ・アルムカッラマ」は、「栄光あるマッカ」という意味です。「ウンム・アル・クラ」は、「町々の母」という意味です。いろんな町があるけれども、その中で一番優雅な町、代表的な町、それはメッカだと、こういう呼び方をし、自分の住む町を誇りに思うのは、いろいろな民族が等しく感じているところです。イスタンブールもイスラム世界で有数の町です。イスタンブールは、ギリシャ語から出た言い方です。イスラム教徒であるトルコ人たちは、「イスラムボール」つまり「イスラムの満ち溢れた町」と言い、少しきどって「デルサードット」、これは「至高の家」という意味で、たくさん優れた町があるけれども至高の家がイスタンブールであるという言い方をします。流行歌でイスタンブール、コンスタンティノープルと歌われたコンスタンティノープルは、「コンスタンティヌーポリス」、つまり「コンスタンティン大帝の都」「東ローマ帝国を打ち建てた

初代皇帝コンスタンティンの都」という意味からきています。

このように外国にも自分の町を誇りに思う地名、お江戸のように江戸に「お」を付けるということはありますが、姫路のように和語に由来する漢字で、呼び名も響きも漢字もすばらしいと三重奏で響いてくるような名前はないのではないかとことから、今日の私の話を始めたわけです。

三

司馬遼太郎さんは小説家です。私たち歴史学者、歴史家と小説家は基本的に異なりますが、共通する要素が私はあると思っています。司馬さんは元々は福田さんという姓ですが、司馬遷に「遼かに」及ばないという謙虚な意味を込めて「司馬遼太郎」というペンネームをつけられました。

この司馬遷が孔子の言葉を引いており、そこに出てくる「志」は、私と司馬さんに共通するところではないかと思うのです。これは、「我欲載之空言、不如見之於行事之深切著名也（我之を空言に載せんと欲するは、之を行事に見すの深切著名なるに如かざるなり）」（『新釈漢文大系第二二〇巻「史記」十四「太史公自序」 明治書院』）という言葉で、「抽象的な言葉に依拠しようとするよりも、具体的な出来事で説明する方が極めてねんごろで明快でわかりやすい」という意味です。頭の中でいろいろ哲学的なものに抽象化して考えるのではなくて、具体的な事実に基づいて出来事で説明することが大事なのだと孔子が述べた、と司馬遷は記しています。これはたいへん大事なことで、私が大好きな言葉です。こういう点で司馬さんと私たち歴史家、少なくとも私との間には共通する要素があります。このような問題意識と手法的なことに関して共感する部分が私としてはあると考えています。

従って哲学小説というものはなかなかむずかしく、抽象性でものを表わしていく小説は余り読まれません。け

れども歴史小説は読めます。この代表者が司馬遼太郎さんでした。

歴史小説がなぜ読まれるのか、それは読む側にとってわかりやすいからです。事実在即しているので具体性を帯びています。歴史家が書くものは分かり辛いけれども、小説家の書くものは分かりやすい。そういう違いがあるけれども歴史を素材にし、学んでいる限り、小説家と歴史家はかなり近づく可能性はあるわけです。

しかし、大多数の学者を志した若者は、小説家をめざすということはありません。私は職業として歴史学を選びました。才能の問題もありますが、一度も小説を書こうと思っただけではないのです。やはり、具体的にロシア史、あるいはイスラム史の史料を読み、それらの中で考える癖ができましたから、職業的にものを書くときはロシア史やイスラム史の具体的な流れの中で物事を考えるのです。

司馬さんにお見せることはできませんでしたが、その成果として東京大学を退官するときに『中東国際関係史研究』（二〇一四年）を出しました。

四

司馬さんが生きていたら、どのようにお考えになったのか、個人的におたずねしてみたときがいくつもありました。

その一つは平成二八年（二〇一六年）九月から行われた「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」です。これは一四回にわたって首相官邸で行われ、最終報告書が平成二九年四月に出されました。私もこのメンバーの一員で、会議では、現上皇陛下、先の平成天皇のご退位が是か非かということに関して、天皇の三〇年近い公的活動の実態等々や、憲法や皇室典範、皇室経済法など法律も含め、様々に議論した結果、皇室典範の補足追加という形でご退位をお認めするという憲法上の手続きを踏みました。上皇という言葉は二〇一〇年前の大宝令や養

老令に規定された言葉で、それを復活させました。皇后さまに関しては、上皇后という称号を新たに作りました。皇太子ではなくて、次の天皇になられる方をどのようにお呼びするか、これが難しい問題でした。皇室典範や皇室経済法を何十回となく読み返し読み込んで、また律令制度や江戸法に至るまで調べていきました。すると使用例としてあった言葉が、皇室典範の中にやはりありまして、それは「皇嗣」という表現です。皇嗣という表現を使えば、それが皇太子、つまり皇子なのか、あるいは皇太弟なのか―天智天皇に対する天武天皇のような皇太弟という言葉を使うのはやや難しい点もありましたので、それらをクリアする言葉として「皇嗣」という言葉を復活させ、現在に至ったわけです。

こういうプロセスについてまさに司馬さんがどのようにお考えになられるのか、私個人としてうかがってみたいものであります。

五

司馬さんのお話をしたところで、少し切り口を変えてみます。

ニコロ・マキャヴェッリという人物がいます。彼はイタリアが生んだ政治思想家で、最初の政治学者とされ、世界中の政治学者が尊敬している人物の一人です。

マキャヴェッリはこう言っています。「世の識者は、将来の出来事をあらかじめ知ろうと思えば、過去に目を向けよと言っている。この発言は道理にかなったものである。いつの時代をとわず、この世の中のすべての出来事は、過去にきわめてよく似た先例をもっているからである。つまり、人間は行動を起こすにあたって、つねに同じような欲望に動かされてきたので、同じような結果が起ってくるのも当然のことなのである。」（『世界の名著16 マキアヴェリ』『政略論（デイスコルシ）』中央公論社）。従って過去を学んで過去についてたくさん

タを持っていると、現在、あるいは未来の予測はしやすい、ということを行っています。この言葉は常に私が教訓としている言葉です。

六

私は、中東研究、イスラム研究をしています。同時に日本人が自分の国や国民の歴史をどのように考えるかという視点を持つことによって、自分の歴史の見方を世界的に位置づけようという意欲があります。

司馬さんであれば小説にするところですが、私は史論という方法を使い、エッセイを学問的にした「將軍の世紀」を「文藝春秋」に足掛け三年、令和二年（二〇二〇）の秋まで連載いたしました。これは、私にとって大事な仕事であり、このコンテキストでも姫路に関心ができます。こうした連載の動機には、天皇のご退位の問題も大きかったです。

現在の私たちが一番学ぶべき過去の人物はというと、私はためらうことなく徳川家康をあげます。日本という国を統一し、国家として作り、二七〇年にわたる平和を実現し、内戦のない時代にしました。その結果、白亜の城、姫路城も二七〇年間戦争の舞台として使われることなく、今日のような平和都市姫路の礎となったのです。こういう基礎を作った歴史的リーダーは、家康だと思っています。家康は、そういう点で天皇の権威と対立せず、武家の権力としての幕府による支配の正統性を確立しました。私たちにとって現代の日本国政府と象徴天皇制を考える上で、一番参考になる時代と政治体制は、明治国家よりも江戸国家、徳川時代だと考えています。家康のリーダーシップは、江戸時代から現代にかけての政治家の在り方、そして政治と軍事の関係として外国人も学ぶべき要素が多いと考えます。例えば私が先年モロッコやフランスのパリに出講したとき、講演テーマとして私が提示し、彼らの歴史と比較するのに示したのは家康なのです。家康を出すと彼らは非常にわかりやすいと言っています。

くれます。それは家康の物事に関する戦略性、長期的視野について、世界史的に見ても学ぶべき点が多いからです。

七

家康の戦略を姫路で少し考えてみましょう。

皆様は姫路市民として池田輝政の名前は馴染深いと思います。輝政がある時期、西国將軍、あるいは姫路宰相百万石と呼ばれたことは、小学校の郷土史教育でも学ばれたかもしれません。なぜ、そう呼ばれたのか。もとは池田輝政の妻は、中川清秀の娘でした。輝政は彼女の死後、家康の娘の督姫と結婚します。督姫との間に、忠継、忠雄、輝興、政綱などの子供が生まれました。家康の孫にあたる彼らが無高を抱えておくわけにはいかず、輝政とは別に石高を与えることになります。輝政だけでも姫路五二万石を与えたのに、次男の忠継に二八万石を与えます。慶長八年には忠雄に六万石を与え、他の弟たちの禄高も合わせると池田家は九二万石となり、百万石をやや超える加賀の前田家に匹敵する大大名がここに現出したわけです。

その理由は、まさに戦略的な問題です。それは姫路、ひいては播磨、その播磨の中核都市としての姫路の重要性に関わるものです。現代においても兵庫県の南西部に位置する姫路は、近畿地方全体の西部でもあります。それ故に中核市であり、〈国際会議観光都市〉という形で日本における都市の中心性を誇っております。このように現代においても重要性はあります。戦国時代から江戸時代にかけて姫路は山陽道の中心であり、商業都市としても重要であり、かつ戦略拠点でした。いざ軍事的、外交的に必要となったとき、姫路は戦略都市として変貌していくのです。

関ヶ原の戦い以降の西国を皆さんも考えてみてください。大坂には豊臣秀頼がいました。近畿地方の西部か

ら中国、四国、九州は、すべて外様大名で潜在的な敵対勢力でした。徳川国家を作り上げていく中で、妨げや障害となりうる危険性を持っていた大名たちが、山陰道、山陽道、南海道の四国、それから九州にいたという状況を考えましょう。すぐの岡山、広島、防長二州に押し込められた毛利、土佐の山内、あるいは阿波の蜂須賀など、西は全て外様大名なのです。もし彼らが反乱等を企てたときにどうするか、その防衛の最前線が姫路だったということです。

政治外交的には大坂です。大坂城代というものを幕府は置き、かつ姫路に信頼のおける大名を置かなければならなかった。池田家は家康の娘を得ることにより、次男、三男以下は全部家康の孫となりました。したがって外様大名ではあるけれども、親藩に近い大名になったわけです。

家康の警戒心は、姫路を常に安定した信頼のできる譜代大名でなければいけないという点に現われています。できれば徳川一門である御家門の大名が良い。歴代の姫路藩の藩主家を見ていくと本多以降、松平（奥平家）、松平（越前家）、榊原、松平（越前家）、本多、榊原、松平（越前家）、酒井と、すべて徳川四天王の系列の家、あるいは徳川家一門の中でも近い、家康の次男、結城秀康の血筋、越前家の大名たちが封ぜられています。

これは姫路を重要な戦略性を持った場所として位置付けをしていたということです。この要衝を任せることのできない大名が出てくると国替えを行い、非常に神経を使っていたということです。例えば榊原政岑です。先程、姫路文学館に行きましたら榊原政岑が展示されていました。なぜ有名かといいますと江戸の新吉原の高尾という最高級の傾城を落籍して姫路につれてきた乱行が幕府に忌避されたからです。こういう人間に姫路を任せられません。文学館の説明はやや美しくしてあり、政岑と高尾の愛、そして高尾が政岑に愛を尽くしたと現代的な見方をしていますが、江戸時代において吉原の傾城を落籍するために数千両を費やすということは、姫路の町民、農民、商人たちが、何のために働き、何のために税を払っているのかという基本的なところに戻ります。将軍家からする

ととんでもない為政者だということになり、榊原は転封になりました。そういう厳しさが姫路にはつきまわったのです。幕末までの百年間は酒井家で落ち着きました。

八

その中で松平越前家に直矩という大名がいます。この直矩の日記が『松平大和守日記』といい、たいへん面白いのです。そこにこういう文章が出てきます。「寛文七年（一六六七年）、巳の上刻（朝の九時）に黒書院にて御目見え」とあり、「御近へ寄候へ」（近こう寄れ）というわけです。そして上意が達せられる。当時、越後の村上にいた直矩が、「播州へ御暇下し置かれ、万事念を入れ仕置等申し付くるべき旨、大坂に指し置かる御城代之面々と万事申し合ふべき旨仰せ出さる」という記述があるのです。これは「御近へ寄候へ」と将軍が語るわけではなく奏者番もしくは若年寄に言われ、将軍の側近くで畏まって聞いた内容が丁寧語を使って記録されているわけです。将軍は大名に対してこのような長い言葉をかけません。決まった言葉しか発しません。これは将軍がじかに出てきて執務空間の最上級の部屋である黒書院で、おそらく対面で単独拝謁し、言われた言葉です。一つは、老中が言うのですが、「播磨へ国替えをいたす。すべてにおいて注意深く、政治的な措置を行うように申し付ける。」と。普通の大名であればこれで終わりますが、姫路に特化したもう一つが「関西以西を實質支配する大坂城代たちに、すべて相談するように」ということです。ここが大事なのです。つまり姫路の城主は自分の領地の支配だけでなく、常に大坂城代と相談して西国情勢を見るようにということだったのです。

二日後の七月二七日、大老の酒井雅楽頭忠清―第四代将軍家綱から第五代将軍綱吉にかけて大老を務め、後に姫路にやってくる酒井家の祖である人物です―彼に対して大和守は早くも自分の使命を理解し、伺いをたてます。当時姫路藩は、室津、家島、飾磨、高砂の四つの津を支配し、番所を置いて瀬戸内の海上を往来する様々

船に目を光らせるという仕事を課せられていました。それを承知しているからこそ酒井雅楽頭に対して大和守は真つ先に「番所にいる士分の数をどうしたらいいか」と訊ねます。すると雅楽頭は「西国の情勢に慣れるまでは二人で良いところを四人にしてはどうか」と提案しています。

即ちこれは、姫路藩の使命は何であつたのかということに関する一つの説明なのです。

九

この飾磨津、室津の番所に関しては「万覚書」、つまり注意すべきことが文書として残っています。これを通して姫路藩というものの姿、ひいては当時の姫路の在り方というものが見えてきます。

一つ目は、プロトコル―儀式、儀礼のことです。大坂以西において最も重要な、または大坂城代と並んで最も重要な位置にある姫路藩主は、江戸から来る、あるいは江戸に帰る上使、すなわち幕府の公用で出張してくる者に対して不備があつてはいけません。その儀礼、儀式をきちんと行わなければならないのです。上使の船が着けば急いで姫路城に注進すること。その上使たちが飾磨津や室津に滞在する場合は日々の様子を藩庁のある姫路城まで知らせること。そして、上使でなくても公儀の荷船や大名の船が着岸したときと出船したときの模様を知らせること。これらが室津や飾磨津等の四つの番所の大きな使命でした。その中で「ご馳走」、つまり接待をどうするかについては、「何事も先例に従つて落度なきように」と先例にならつて応対し、幕府に失礼があつてはいけないというわけです。

二つ目は何かといいますと、後には譜代大名も混じるようになりますが、西国は基本的に外様大名の世界です。したがつて西国情勢に変動があるかどうか、常に気を付けなければいけません。変化の探知ということが大事なのです。上使の船の着船の「風聞」、つまり上使の船が来るという噂があれば注進する。実際の着船がなくても

上使や外様大名の「御渡海」、これは瀬戸内を横行するという理解でよいかと思いますが、上使や外様大名の船が渡海するという噂があるだけで注進する。もし漁船が海上でこれらの船の姿を見たらすぐに帰つて番所に知らせること、つまり瀬戸内の船の往来についても幕府は非常に神経を失らせ、その最前線における探知機能を姫路藩の番所に持たせたということです。

三つ目は情報の収集です。九州、四国、中国、大坂、堺といった上方や西国の様々な動きについて、常に船が行き来し、それらが飾磨津や室津に入ってきたとき、上方ではこう、博多ではこうと起きたことの最新の情報やいろいろな噂話は、船や旅人がもたらしました。そういう情報があれば、「珍しき取沙汰仕候は、たとえ雑説定かならざるにても苦しからざる候間、其の通り書付いたし封し判を押し」姫路城に届を出す。つまり、はっきりとした根拠がない話、あるいは証明されていない噂、やや不確かなものであつてもかまわない、言われているとおりにすぐ姫路城に報せよということです。姫路城、つまり藩庁はその情報をどうするかというと、ただちに帰国中であれば藩主と、そうでなければ城代家老と協議し、まず大坂城代に知らせるというシステムが出来ていました。

最後は、外様大名の観察です。はつきり名指していません、鹿児島島の島津、博多の黒田、熊本細川、佐賀の鍋島、萩・山口の毛利、柳川の立花、岡山の池田、久留米の有馬、広島浅野、宇和島の伊達、対馬の宗、鳥取の池田、美作の森、これらの外様大名と松江の松平の一家の船が着いたり、逗留したり、出て行ったりしたら、すぐに注進することと書かれています。西国大名は後世になると山陽道を使うこともありましたが、基本的に瀬戸内海の海路を参勤交代します。彼らの様子を飾磨や室津、高砂、家島の番所で見ていたということです。松江の松平は、姫路の松平の兄弟格に相当する家柄で同じ越前家の一員です。これは便宜供与の色合いが強かったと私は見えています。その他はみな外様大名でたいそう神経をとがらせていました。

十

このような姫路の位置づけ、あるいは西播磨の位置づけをよく見ているのは外国人です。外交を持っていた例外的な国家、李朝の外交官たちが朝鮮通信使としてやって来ます。そのケースについて少し見ておきましょう。外交官というのは、やはり観察力を持たなければいけないわけです。観察力と記憶力、そしてその復元力が必要となります。これについて一七世紀フランスの太陽王ルイ一四世の寵臣で外交官だったフランソワ・カリエールが『外交談判法』の中で「事実や歴史に詳しいということは、交渉家が敏腕であるために大切な素養の一つだ。何故ならば、理屈というものはしばしば不確かであるから、大抵の人間は前例に従って行動し、同じような場合にどうであったかを基準にして、決心をするものであるから」と語っています。これは先ほど私がご紹介したマキャヴェッリの『デイスコルシ』の言葉に似ています。カリエールは、もちろんマキャヴェッリの著書を読んでいたから、こういう発言が出てくるのです。

一一

そうすると姫路を通っていく外国人たちが、実によく観察し、一番にものを見ているということがわかってきます。

江戸時代、摂西郡の室津は、姫路藩領として発達したところです。御津町に組み込まれ、現在ではたつの市に入っているのですが、今の行政区画では姫路と関係がなくなっています。

その室津について、享保四年（一七一九年）に八代將軍吉宗の將軍襲職祝賀のために来た朝鮮通信使、申維翰（シンユハン）が『海游録』（『海游録』姜在彦訳注 東洋文庫 平凡社）に記録を残しています。内容は、だいたい「哺の刻」

つまり午後四時頃に室津に着いて泊まった、「室津もまた播磨州の地である。太守源政邦（神原政邦）は一五万石を得ていて、姫路城を治めている。そして自分に祝いの品を届けてきた。『それには「神原式部大輔」と書いてあった。』『館宇（室津に置かれた藩のもてなしのための客舎）は、非常に「敝麗」（広くて美しい）である。前に見える湾、つまり室津の港は、「水濶く、山は峻しくて雲霞」がただよっている。『四方を眺むれば、奇勝（珍しい景色）』『が客の感懐をすこぶる爽やかにしてくれる。』瀬戸内のこの辺り、室津はいいところだと記録しました。

我々が今も見ている場所を、一七一九年に通った朝鮮人たちは外交官の目で、このように清く正しく後世に残してくれています。室津の現在は、申すに及ばないことであります。

申維翰は続いて姫路に来て、次のように描写しています。

「鹿窓（飾磨）を過ぎて姫路城にいたる。城は高大にして、数十里にわたる。五層の譙楼（しやうろう）があつて」（譙楼はもともと物見櫓のことですが、ここでは城楼つまり天守閣を指します）、「曲曲と聳え立ち」（小天守と大天守の複合天守閣の様子を語ろうとしているのでしょう）、これらが「暁の光を受けてかすかに浮かびあがる」、「村里を見ると、人民の盛んなること、海門（海峡つまり瀬戸内）の雄府（代表する町）として最たるものである。」「一名を娘尼城ともいい」、「娘尼城」は姫路城が自然かと思ひます。調べてみたのですが日本の史料では出てこない言い方です。姫路城は源（神原）政邦の居る所であると記しています。外交官の目で見たときに姫路城は立派なものだと書いているわけです。

「曲曲と聳え立ち、暁の光をうけてかすかに浮かびあがる。村里を見ると、人民の盛んなること、海門の雄府として最たるものである。」が、とても良い表現で私は好きです。今朝、ホテルで目が覚め、姫路城を眺めてから参りましたが、申維翰も同じような風景を見たと思われまます。

一一

宝暦一三年（一七六三年）から一四年（一七六四年）に、一〇代将軍家治の襲職の祝賀に朝鮮通信使が来た時の金仁謙作『日東壯遊歌』（『日東壯遊歌』高島淑郎訳注 東洋文庫 平凡社）も興味深いものです。

牛窓（現瀬戸内市）には瀬戸内の重要な港湾があり、室津と並んで参勤交代の大名や朝鮮通信使が必ず立ち寄っていました。一月一日、その牛窓、そして赤穂、室津と使節はやってきます。「室津の船着場は変化に富み」ちようど対馬の「佐須浦（佐須奈）」と同様にみえる」とあります。佐須の浦を非常に褒めておりまして、「見事な眺めである」と果樹についての描写をしています。そして室津は「人家が軒をつらね」、自分たちの泊まる「館舎も大きく立派である」と。申維翰も書いたように、やはりゲストハウスはすぐ立派だったということが語られ、「播磨の国に属す」と記している。一月一日に「北西の風」が出たので「日の出の頃に船を出し」、「五里ばかり進む」と播磨の太守のいるところを見た、「漆喰を塗った外壁が 樹々の間に見え隠れし 黄金の飾りを施した三層閣は 雲間に聳え立つ」とあり、これは姫路城の太守のことです。「ここからの左右両側は 山低く野はひらけ 人々の住む村々が 途切れることなく続いている」——非常に立派だ、素晴らしいと言っています。見物人がやってきて「男女それぞれに群れをつくり あたり一帯を埋め尽くす」こういう外国人使節の到来に歓迎の気持ち、あるいは好奇心があるということが外交官によって記されています。

一二

私の専門ではないのですが、室の海、あるいは室の泊に関して、よい和歌があるので紹介します。「むろの海やせとのはや舟なみたててかた帆にかくる風のすずしさ」（『拾遺風体和歌集』。藤原信実の歌です。これは納涼

の歌ともされる涼しげな歌であります、本当に納涼だけだろうかと思っています。室は繁栄した街ですから、それにとまなう廊や色町などもあったはず。そのときに瀬戸の早船が波をたてながら一刻も早くそこに訪れようとする雰囲気なども感じられるというのは、私が俗人であるがゆえの解釈としてお許しください。

次は大江茂重の歌です。「友さそふ室のとまりの朝嵐に声をほにあげて出づる舟人」。朝、友が出漁だと誘っている、山から海に向かって吹く風に大きく帆を上げて出漁しようとしている船人がいるではないかという意味です。

一四

フィリップ・シーボルトが、一一代将軍家斉のとき姫路附近を通り、『江戸参府紀行』（『江戸参府紀行』斎藤信記 東洋文庫 平凡社）としてすばらしい記述を残しています。

姫路の美しさ、龍野の美しさに加え、この界隈の河川について迫力ある描写がされています。龍野は、正条川と正条の渡しのかたりで偲ぶことができますが、姫路についての記述を紹介します。

シーボルトは博物学者でもあったため、姫路に入っていくときの地名、植物名などをよく観察しています。まず、阿曾村、現在の太子町阿曾です。その村の「付近でわれわれは、同じ阿曾川という名の小さくなっている所々で歩いて渡れる川を渡り」とあり、続いて「釜屋」（現たつの市御津町）、「斑鳩」（現揖保郡太子町嶋）、「山田」（現揖保郡太子町山田）、「網干」（現姫路市網干区）と通っていく。山田は、ヤマダでなくヤマタ Yamata、網干はアボシではなくアヲシ Awoshi と表記されており、言語学から言うと非常に興味深いことではないかと思えます。

姫路という町は、ある川の「両腕」——両腕というのは支流と解釈して、西が夢前川、東が狭義での市川で、こ

の二つの川の両腕―に挟まれて出来ていると記していて、これはシーボルトの観察力のするどさを物語っています。そして「河原石でおおわれた右側の浅い流れを越えて」とあり、姫路から龍野にかけて、この地域特有の河原石があることを忘れずに観察しています。私たちはこうして外国人たちから多くを学ぶわけです。

そして姫路の町に入ります。姫路の町は商店が整理整頓されている、商店は商品が見えるように並べており、住民たちの秩序が行きわたっている、法律がきちんと守られている、住民でモラルに反するようなことをする人はおらず、好奇心を持っていていけれど法を犯したり、行儀の悪いことはしない、とあります。「姫路の町は播磨領印南郡の市川のほとりにあり、市川は町の上手でふたつにわかれ」島を形づくるようだ。いずれにしてもすばらしい城であると記し、城にドイツ語でシュロス (Schloss 城郭) という言葉を使っている、「シュロス (Schloss) そのものは城 (Siro) と呼ばれ」ていて、男山を背にしていると観察をしています。

このようにして姫路に滞在し、出発するのですが、その日はたいへん寒い日で華氏で四〇度 (摂氏四度) くらいで雪が降ったが、雪溶けして天候は悪く、難儀したようです。市川を舟で渡り、「骨の折れる旅」で曾根に着いたと記しました。

曾根と言えば、神姫バス停留所で小林東とJR曾根駅の間にある停留所が曾根なのですが、そこは「曾根 (姫路市)」という名称になっていたようです。行政区画で曾根は高砂市なのに、なぜそこでバス停が「曾根 (姫路市)」となっているのが非常に不思議だと、このシーボルトの紀行から思いました。(その後、高砂市と訂正されたようです)。

一五

シーボルトや朝鮮通信使もそうですし、司馬さんも文学と言う立場から行ってこられたように、書物を読み、

書物からものを学ぶということは、吉田松陰の『講孟余話』の言葉を借りれば、「これまた故に則のみ」、すなわち「故」は歴史で、古いことに依拠して私たちはものを考えるということです。

今の私たちが市川や夢前川、姫路の町の歴史を考えると、先人である朝鮮通信使やシーボルトたちが正しく敬意を払って触れてくれている記述が、大事なことであろうと私は申し上げたかったのです。

一六

最後に、私たち歴史学者にとって忘れることのできない二人の姫路が生んだ歴史家の名前を紹介します。

皆さんにとっては当然かもしれませんが、東京大学文学部の史学科、史学会、歴史学界、ひいては東京大学の史料編纂所という歴史学者にとって大切な施設を明治の時代に作り発展させた大先達、大先輩はいずれも姫路人です。

三上参次先生は船津で生まれ、養子となって野里の威徳寺町で砂糖・乾物商を営んでいた養父によって育てられました。辻善之助先生は姫路の元塩町の生まれです。

二人とも姫路中学校、現在の姫路西高等学校の卒業です。私の教え子にも姫路西高校の出身者がおり、「先生の姫路の発音は、あまりよくない」と、正しい土地の発音を教えてくださいました。この二人の大先達をぜひ皆さん、今日の私の話の最後としてご記憶ください。

三上先生は広田内閣のときに文部大臣就任を望まれて、それを断られた方、辻先生は文化勲章を受けられた方で、日本の歴史学界だけでなく文化界全体にも大きく貢献された偉人です。司馬遼太郎さんと共に、ぜひ今後ご記憶くださればありがたいと思います。

“Id est quod est.” と云うのは、「かくのいふところあるものは、かくのごとくある」というラテン語の金言です。

私たちが歴史を学ぶ、学問としての歴史を学ぶときは、うそであることをみだりに書いてはいけない、あるものがあるものとして記述しなければならない、それが歴史学、歴史家なのだということです。

この *"Id est quod est"*、という言葉を拙ない講演の結びの言葉として終わらせていただきます。

今日は、姫路でお話する機会をいただきましてありがとうございます。